

宇宙多重人格者 (The Trinne Man, 1976)
リチャード・A・ルポフ (安田均訳) 東
京創元社 (文庫) (12/2刊・450円)



ルポフって、割と単純な人じゃないか、なんて思う。ケナしているばかりじゃなくて、いい意味でもそうなんだらうって、思うのです。初紹介作が不幸というべきか、ちょっとイケない。日本神話風ヒロイックファンタジイの『神の剣 悪魔の剣』。イラストから、内容から、どう考えてもズレている。日本人には、とてもまともに読めない話になっていた。しかし、二作目の『バスルーム』は、ル

ポフのマニア的一面、アマチュア的な遊びの精神が強く出ていて、なるほどこういいう書き方を、する作者だったのか、と考え直す機会を提供してくれている。

コミックライターの、パディ・サドヴァンは、ふと気がつくといと銀河の彼方にある人工惑星ス

ラヴァステイにいた。宇宙を消滅させる大災厄を防ぐ救世主として選ばれたのだ。しかし、一介の漫画家である彼が、なぜ選ばれたのか。『宇宙多重人格者』という、すごい題名になっているけれど、原題は、三位一体人間。で、実はこの主人公の中には、三つの人格が隠れている。一人はパディ、もう一人はケチな右翼団体「合衆国再生同盟」のボスであるウォッシュバーン、最後の一人が鉱山技師スートロ。多重人格者が主人公という、なかなか面白い設定。地球とストラヴァステイの間を、めまぐるしく動きながら、ストーリーは展開する。シンジケートが牛耳っている、アメリカコミック界の内幕シーンなどもあって、結構楽しめる——そう思った理由は、先に訳された二作が持つ、『遊び』の精神を、本書にも想定したからだ。

ところが、途中から第二次大戦中のヨーロッパが場面に入ってくる。それは、あるユダヤ少年のエピソードで、当然、ナチスユダヤ人↓アウシュビッツというパターンを辿ることになる。実はこの少年の正体が——となつて、お話は一転、少年と主人公との結びつきに焦点を移してしまう。

結論からいえば、やや残念な処理に終わっているようだ。宇宙の破壊が、一人の人間の奥底に潜むトラウマ究明にすりかえられてしまった。逆の形ならば、まだよかった。もともとと深刻な話じゃない、それははっきりしているのだから。

古典的なフラウン『発狂した宇宙』に似た物語である。異世界ものをリアルに書くといふやり方も、それはそれで価値があるのだから。けれど、アメリカで大流行の異世界ファンタジイまがいの作品は、もう新世界の面白みも衝撃も、ほとんど希釈してしまっている。その一方で、とにかく人工的な世界、例えばコミックヒーローの世界を舞台に、軽く話を進めていくのは(ぜんぜん主流とは違いますが、にしても)一つの流れである。軽く、だが、決して価値が軽いわけではない。本書でも、コミックのストーリーが、エピソードの一つにあつて、やがてヒーローたちがストラヴァステイに現われ、主人公と出会ったりする。ここから、さらに世界が『多重』に分解されていったなら(評者はむしろそんな話を期待した)もしかすると、迫力ある傑作になっていたかもしれない。軽い。世界は、その軽さを利用して、次々とエスカレーションを起しやす。エスカレーションの爽快さは、この類の話が持つ特長の一つである。けれども、ルポフはそこまで踏み切らず、現実と非現実との混淆には至らない。どうせならば、と思うんですけれどね——しかし、『宇宙多重人格』の場合には、ちょっと簡単にまとめすぎたのではないか。そんな意味でも、ルポフは単純なんですよ。もうあと少し遊びに徹すれば、さらに面白くできたのに。——ただし、面白さはある程度保障できる。読んで損する話じゃありません、念のため。